

曙山さん

泉鏡花作

全一章

かゞなふれば早や五歳がほどにあひなり候。八月  
未の事なりき。我が長屋、神樂坂の裏に、三月四月  
店賃の滞りの、重き瓦を荷びて、實にこそ三伏の暑  
さに苦しみ候をりから、貴兄の來臨をかたじけな  
節、一束の花を賜り候。美しさ夢の如く、晝寢の顔  
の恍惚して、君が顔と花の色とを瞻りつゝ、唯是は、  
是は、と申し候のみ。

折から向う堤防の草の中に、汽車の煙の晴間にも  
ほの見ゆる、常夏のなほざりげなるさへ、其の名を  
知らず、葉の姿を辨へず。桔梗、萩は、百花園にて  
視むるもの、おいらん草、蝦夷菊は、縁日の植木屋  
が店にて見るもの、と合點したる事なれば、頂戴し  
たる草花の、其の名を知りたるは一つもござなく、  
打水の雫ながら、斜に差置かれ縁側に、恰も腕白  
が買立ての金魚に見入りたる體に頬杖して、さなが

ら御土産の産地品名を、目のあたり相たゞし候如き  
不躑を顧みず、此の紫は、此の眞紅は、此の絞りは、  
此の斑入なるはと、一々御尋ね申候。何々なりけむ、  
花の名も此方に些の下稽古なき者には、なか／＼に  
覚えられ申さず、其の半は忘れ候が、枝ひまはり、  
天神花、姫天神花、大蓼、紅蓼、天竺牡丹、芙蓉な  
ど、中にも俗物の眼を驚かし候は、紐鶏頭の振袖の  
丈にも餘んぬる五尺の紫に候ひき。

はじめて花瓶の要を感じ、貴兄がお歸りを見送り  
候、其の足にて勸工場に駈けつけたつ、暑さの折か  
らなればこそ薪の代を棒にふつて、これは此  
處だけのお話ながら、白瀬戸の大花瓶、少々其の  
……曰くづきにて、格安大割引と云ふのを購ひ、  
一揆の小頭張拔砲を引抱へ、馳せ戻り、さて御心深  
く枝のふりもおもしろく根揃ひに御結ばせなるを、  
其のまゝ手活と仕り、成金流の威勢を示して、おれ  
がのだ、と床に据ゑ、視むれば見れば其の風情、申  
すもなか／＼にて、花の振袖枝にかゝり、疊にこぼ  
れて靡き候。

あはれ塵をもすゑまじきぞ、花瓶に臺をと存じ候  
に、われら式の世帯とて、是へと申す床几これなく、  
箱火鉢をうつむけにして、新聞紙を蔽はんか、炬燵  
櫓を引出して風呂敷を掛けんかなど、奇矯なる動議  
同宿の間に湧きしが、一策を獻ずるものあり、曰く  
蜜柑箱然るべし、と即ち更紗の風呂敷を前廣にあや  
つり掛けて、御恵みの草の花の臺座といたし候ひし  
か。

婦女子輩は、目ざむる活きた薬玉よ、とめでくつ  
がへり候を、可憫、猫を愛して麒麟を知らず、見よ、  
我が家の鳳凰なるを、とそれがし一人脂下り申候次  
第、日中にも水を取りかへ、夜は蚊帳越しに佛を差  
覗きて、夏瘦にもあらぬ身が、ひとへに、花守に浮  
身をやつし候へども、朝夕の秋風に色のうつろふ心  
細さ、最明寺殿の御ために、牡丹切りしにあらねど  
も、氣のおとろふるばかりに存じ、やがてうつせみ  
の夕日の影とあひなり候を、なほ塵塚へ葬り果てず、  
高樓と云はんは其の花に對する慇懃のみ、低き二階  
の欄干より、一坪の庭に散して、霜を被がばもみぢ  
せよ、と折からの夕月に消えがての姿をしのび候。

餘りの残り惜さに、いでさらば其の俵を寫さんと  
て、其の時の結縁より、はじめて貴下が園藝宗に歸  
依いたし、財布の紐を数珠にかけて、縁日の法燈の  
影に、桔梗を一鉢あがなひ候。別に説あるには候は  
ねど、遠州流とゞもに固より鉢物を好み申さず。恰  
も可し、鉢は要らないよ、の筆法を以て、儀式通り  
蚊柱に霧吹く植木屋をまけさせ、根を捧げて立歸り、  
是を籬の下に移し植うれば、然るべき人柄に候處、  
實は何もなき庭なれば、一本の其の紫に、大發緯を  
なさしむべく、向つて正面眞中に据ゑ申候。恥かし  
や、みやびなき人の心に似ず、床しきは花の心にて  
翌日の朝は早や、美しき胡蝶となりて桔梗のあたり  
を戯れ候。

以後も心づけ見候へば、目に青葉なき下町の露地  
にても、撫子あれば、小菊あれば、春は、櫻草、豆  
菊あれば、隨處必ず何處よりか蝶の辿り來る事に候、  
優しき哉。

優しき蝶の、心には似ず候へども、それよりして  
善玉患玉の如く、花の玉や影身に附添ひ、香に酔つ

ぱらつた鳥目を、盛につかはせ候まゝ、縁日の草花  
に、小遣を擲つこと大方ならず。近頃は毘沙門の夜  
の植木屋、牛込見附を、銀河の如くふりかはりて、  
岩戸町の方に、かんでらの星を花の露にきらめかせ  
候が、其時分は、長屋より、つい一跨に候ひしまゝ、  
買方次第に上手になり、果は夜討の奇兵を弄して、  
灯の影の夜風に煽つて、**■**と下伏せになるのを見澄  
まし、一雨颯とかゝるを合圖に、チヨと舌打して秋  
の空を打仰ぐ**■**駝が足許をかつぱらひ、囊中の小勢  
を以て、萩薄の大軍を打なびけ、曳々と勝喊あげて  
生けどり分捕（まさか）仕り候。

根岸の御閑居に罷出で、黄蜀葵、浦島草、鷺苔、  
天神花、草龍膽、高野のお面などをおねだり申候は、  
其の翌年の事に候ひし。

かばかりの名を列ね候も、皆おしこみにござ候。  
然も其時は、苗にて頂戴、前年花をおんかづけの節  
とは違ひ、一つ一つ名を承りて、附木の札を根には  
さみ、如何なる姿や、色や、香や、とやゝたけのび  
たる貝割葉を、筒井筒ふりわけ髪に搔撫でつゝ、相

待ち候思ひのほど、又なくなつかしくござ候。

逗子へ参り候て、此の春ごろ、新聞に廣告して、  
種子を分ち陳情知りたる人のあり。十銭が處十四五  
種、いづれも洋名にて、われら知己のものとはこ  
れなく候ひしが、又其も一興と存じ、都ならば猫の  
額、こゝらわたり蟹の甲ほど裏の農家の唐黍畑の隅  
を借りて、此の度は種子より仕立て、水打つてやゝ  
青々と見え候頃より、どんなのが出る、何が咲く、  
玉屋鍵屋と、朝な／＼い、花火騒ぎの幼稚さ加減、  
御一笑下され度、さて赤き朝顔の、小形なるより、  
はじめて、種々咲出で候を、御著園藝文庫におの／  
＼引合はせ候へば、いづれも本名これあり、件の其  
の魁なりしは、朝鮮朝顔曼陀羅華にござ候。原名を  
寫したるを、此の度は附木が竹切とあひなり、皆さ  
しはさみ置き候へども、泥にまみれ、雨に濡れて、  
早や解り申さず、然ればとて記憶いたさず、残多く  
候が、然し或は其の洋名の忘れられて、わが飛燕草  
又千鳥草、草菖蒲、大日まはり、同じく菊咲、枝、  
姫ひまはり、小町草、蝦夷菊、花菱草、美女櫻、王  
不背行、など咲き出で名のり分け候が花たちの本懐

ならんも知れず候。

又こゝに、をかしきは、種の中に梨爪と云ふがこれあり、中京邊の名物と承り候を、いまに此の位な爪になるよ、そのうまい事と、植ゑ置き候處、芽を出いた開いな、エツサツサ、と南瓜の唄の如くに忽然として伸び蔓り、大なる黄色が咲き候まゝ、其の形甜爪の如くにして味や梨子に超えたり、軽くして齒につかず、今に奢らう、但し給金からさしひくぞ、と横須賀在來の女中に談じ、頤を撫で居り候處、こは如何に大の字にでも成る事か、化けぬ胡爪がちよぼりと一ツ、切々慾はせぬものと、甘くない腹を抱へ候。

御近著、高山植物の、雲白きあたり金色の堇の如きは、たゞあくがるゝのみに候へども、おかげにて、海水帽を被りたる大日まはりの花の下は、日盛りにも暑さを覺えず。然も此の莖、別荘の毛桃の梢を抜くこと、約一尺に候をや。こゝに蜻蛉の羅に紫の影を装ひ、澤蟹の腕紅の露を抱けり。かゝる視めを知り候はひとへに貴下の賜物に候。

此の絢爛の花畑に對して、お世辭にも羨望の色の  
少なからぬ、腰に腕組む唐黍畑の老地主に對して、  
睡蝶花の奇なるを示し、そも／＼此の花、何時の代  
に日本に渡りしと云ふ事を知らず、米國にては、ス  
パイダア、プラントと呼ぶ、で、そのスパイダアと  
は蜘蛛の事ですが、蓋し其の蕾の形蜘蛛の眠れるに  
似て云々と、園藝文庫の抜讀みを遣り、手を組み直  
して感ずる圖に乗り、並び咲きたる小町草を指して、  
此の花、一名を蠅取り葶と云ふ、蠅を取つて食ます  
ぜ、と大威かしの威かし候へば、アツと云つて、わ  
が力、花をして、しかなさしむる魔法つかひの如き  
面色いたし候。いやはや、園藝の末派跳梁千萬、開  
山の輦蹙おもひやらる。

其の行や胡瓜の如し、と御わらひあれかしと存じ  
候。

【完】